

2018 全国コミュニティ・スクール研究大会 in 三笠
第1分科会:コミュニティ・スクールの効果的な導入

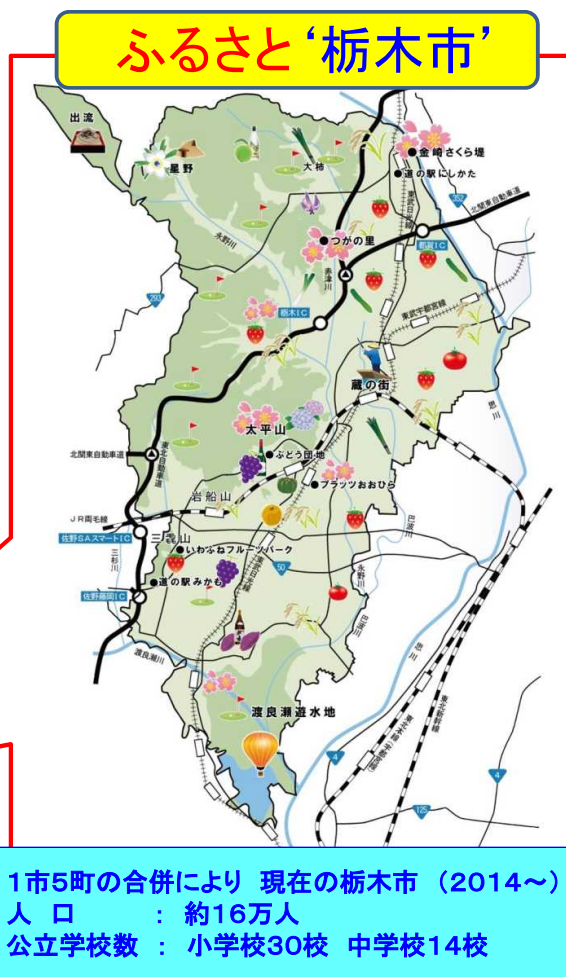
「ふるさと風土で育む人づくり・まちづくり」を 目指すCSの導入



栃木市キャラクター「どち介」

栃木県栃木市教育委員会
教育総務課 課長補佐 木村 信孝
大平中央小学校 校長 鈴木 廣志

‘栃木市’ 知ってますか？



‘栃木市’ 知ってますか？

小江戸文化の風情が残る ‘蔵のまち’



巴波川



秋祭り 山車



渡良瀬遊水池 バルーンレース



太平山 さくら通り



豊かな自然を生かした人々の集い

1. 栃木市コミュニティ・スクール導入の趣旨

本市教育スローガン

「ふるさとの風土で育む人づくり・まちづくり」

根幹を担う教育システム

とちぎ未来アシストネット(※)

(平成24年度～)

学校・家庭・地域の連携・協働を組織的に発展させ、より効果的に「学校支援(教育の充実)」や「地域の絆づくり」等を図る教育システム

構築

学校と家庭、地域のパートナーシップ

CS導入

更なる醸成

地域に開かれた学校

一歩前進

目標やビジョンの共有
当事者意識・地域の一体化
「地域とともにある学校」
コミュニティ・スクール

子どもたちの健全育成

地域の絆づくり

学校と地域の活性化

地域の教育力の向上

地域の次世代の担い手の育成

※ とちぎ未来アシストネットについて

「学校支援ボランティア活動」や「児童生徒の地域参画活動」を組織的に支援する教育システム

- ① 中学校区・公民館単位での組織づくり（10エリア）
 - ・公民館（「地域アシストネット本部」）に「地域教育協議会」を設置
- ② 地域コーディネーター・学校コーディネーターの配置
- ③ 市全域対象に「アシストネット推進委員会」の設置
- ④ 「ボランティア交流会」の開催（年1回） 参加者：約250人

【平成29年度実績】

学校支援ボランティア 延べ人数 441, 577 人

延べ回数 8, 261 回

地域コーディネーター 66 人

‘コミュニティ・スクール’導入の土壌がしっかりとあった！

2. 栃木市コミュニティ・スクール導入の経緯

平成27年度 ○教育委員会事務局内検討会

（教育総務課・学校教育課・生涯学習課）

→ 次年度より研究的な導入を決定

○校長会への報告及び要請

→ 小中学校44校中23校が導入表明

（小30校中17校 中14校中6校）

学校数の過半数
を超える

平成29年度に

市内公立全小中学校に完全導入を決定

2. 栃木市コミュニティ・スクール導入の経緯

平成28年度 ○23校での導入開始

- ・研究校対象の説明会実施
- ・研究校等への市教委担当者への派遣
(学校運営協議会での説明 年間31校訪問)

○地域等への啓発

- ・市長による記者発表
- ・教育講演会の開催や各種研修会での報告
- ・市広報誌等への掲載

○規則の策定等

- ・栃木市立小中学校学校運営協議会規則の策定
- ・栃木市CSマニュアル(※)の作成

※栃木市ホームページ参照

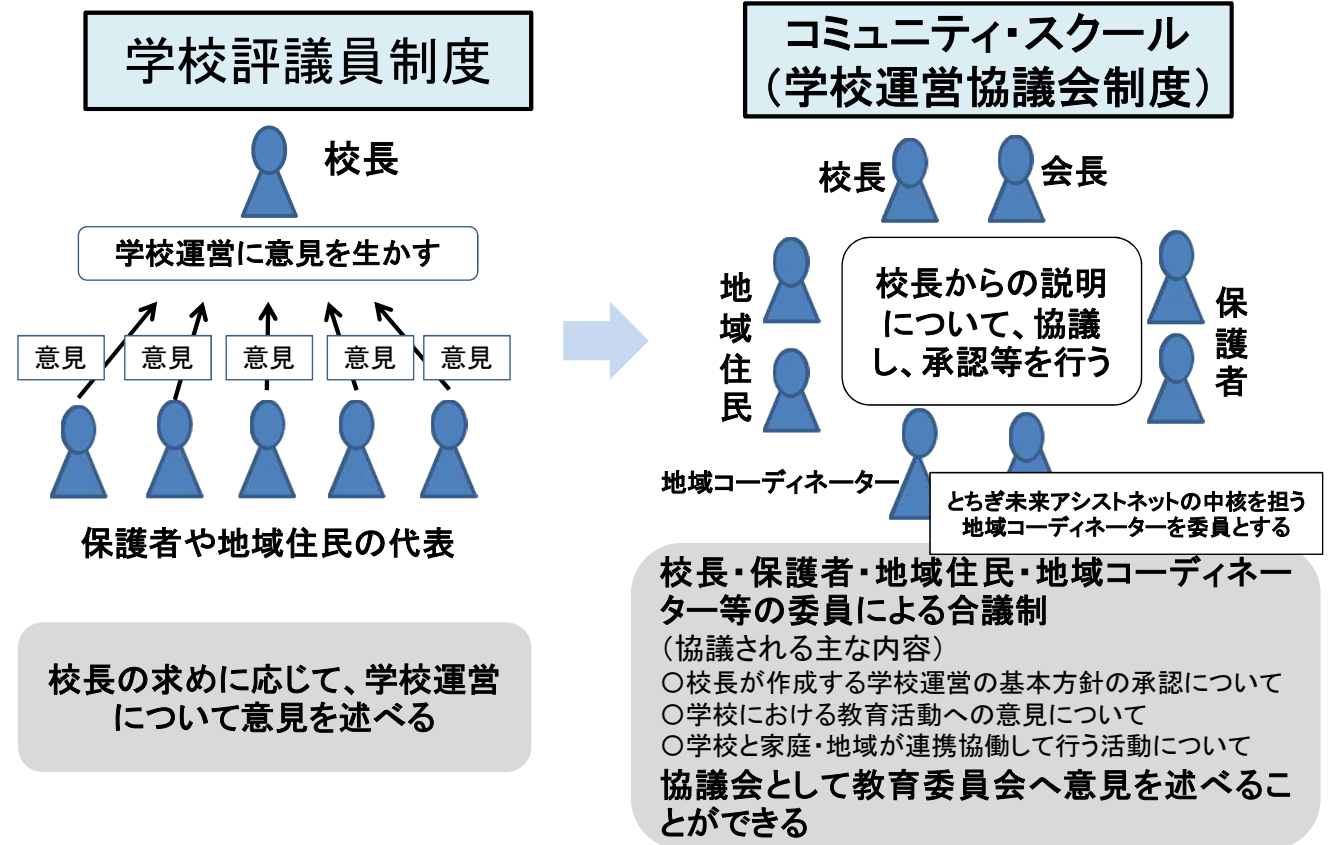
平成29年度 市内全公立小中学校44校での完全導入

3. 栃木市コミュニティ・スクール導入のポイント

- ① 学校評議員制度からコミュニティ・スクールへ
◆学校と学校・地域がより一体となった学校づくり
- ② とちぎ未来アシストネットを基盤としたコミュニティ・スクール
◆とちぎ未来アシストネット推進体制に組み入れる
- ③ 小中一貫教育を支えるコミュニティ・スクール
◆同一中学校区内の学校運営協議会を繋ぐ

① 学校評議員からコミュニティ・スクールへ

～学校と家庭・地域がより一体となって学校づくりができる～

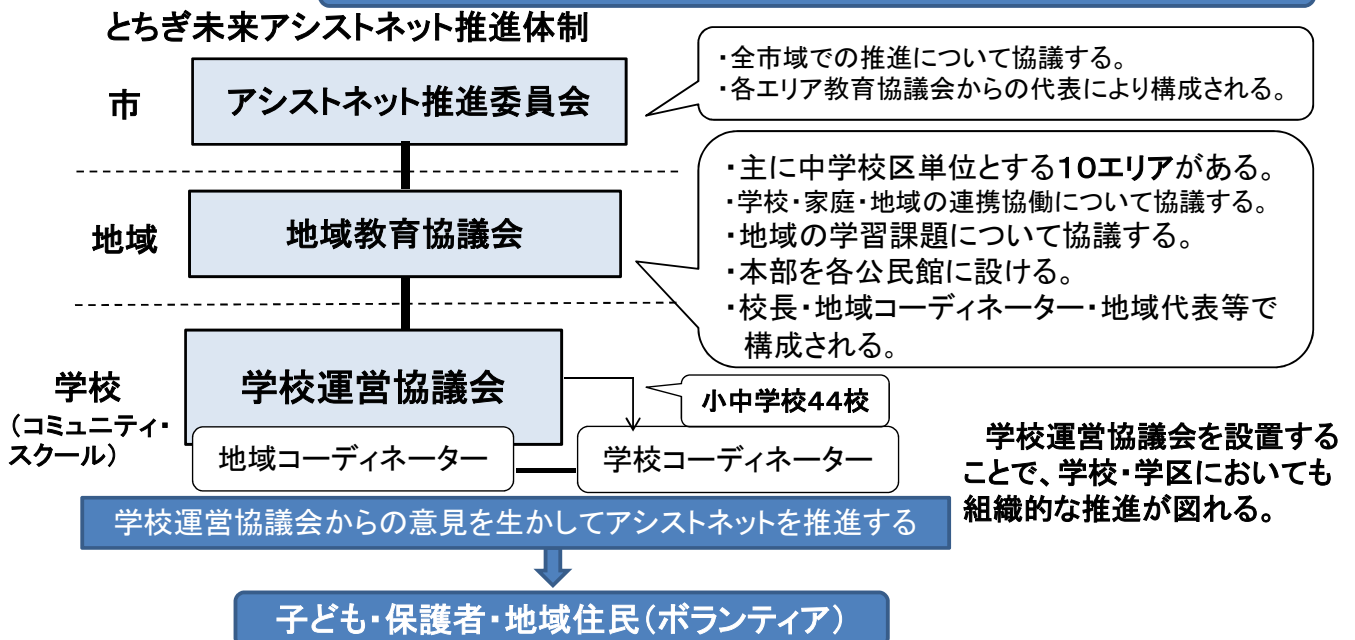


② とちぎ未来アシストネットを基盤としたコミュニティ・スクール

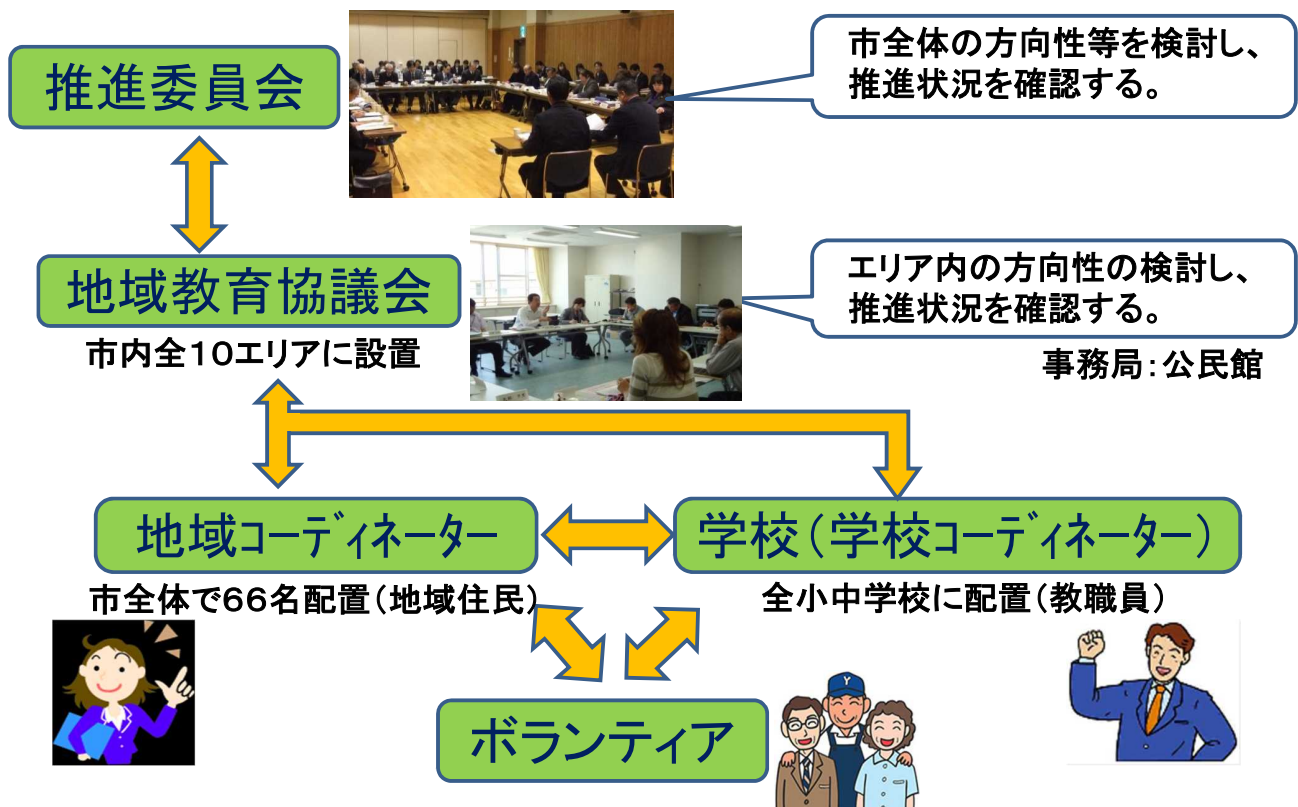
～‘教育の充実’や‘地域の絆づくり’を更に推進できる～

とちぎ未来アシストネットとは、各小中学校区に学校コーディネーター(教職員)と地域コーディネーター(地域住民)を配置して、学校・家庭・地域の連携協働を推進する教育システム。推進体制として主に中学校区ごとの教育協議会や全市域を対象とした推進委員会を設置している。

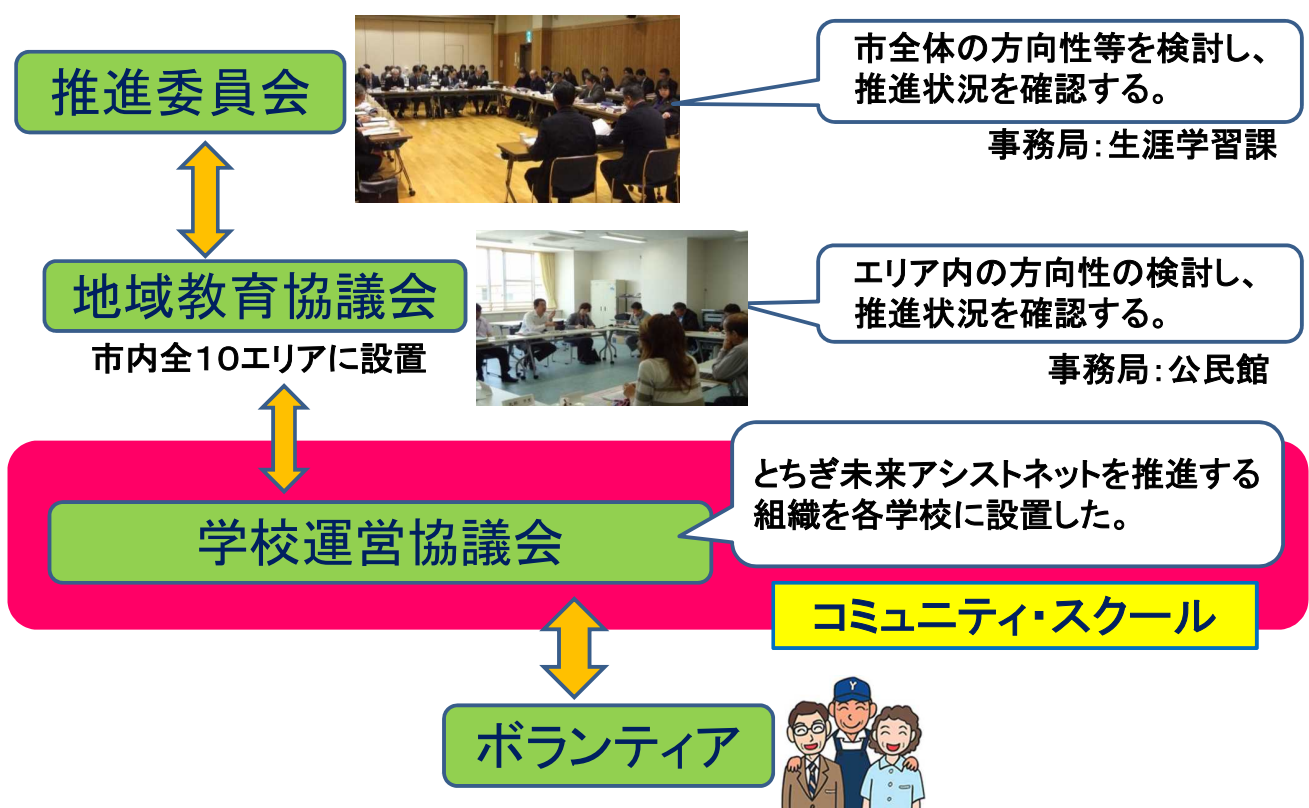
学校支援ボランティア活動や児童生徒による地域への貢献が充実



とちぎ未来アシストネットの推進体制（～平成28年度）

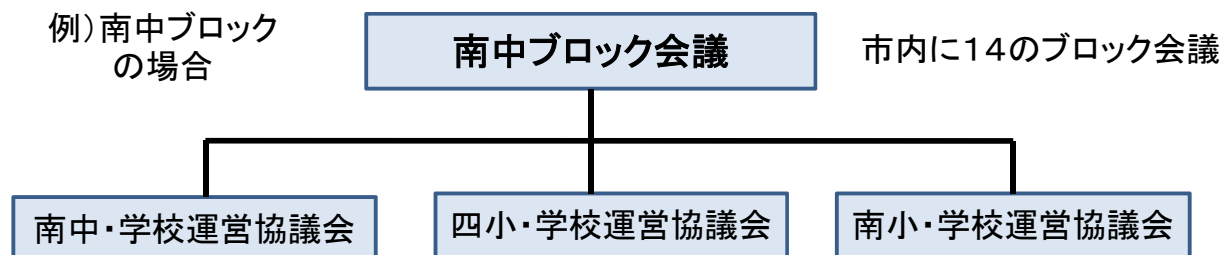


とちぎ未来アシストネットの推進体制（平成29年度～）



③ 小中一貫教育を支えるコミュニティ・スクール ～地域ぐるみで義務教育9年間の学びを支えることができる～

例) 南中ブロック
の場合



1つの中学校区を単位として、それぞれの小中学校の学校運営協議会と「ブロック会議」を結ぶと、その中学校区では地域ぐるみで小中一貫教育に取り組むことができる。



義務教育9年間を見通した
学校・家庭・地域からの組織的・継続的な支援体制の整備
(教育目標の共有・地域の教育課題の解決 等)

小中一貫教育との組み合わせ



4. 栃木市コミュニティ・スクールの現況

(1) 委員数及び選出区分〔H30年度〕

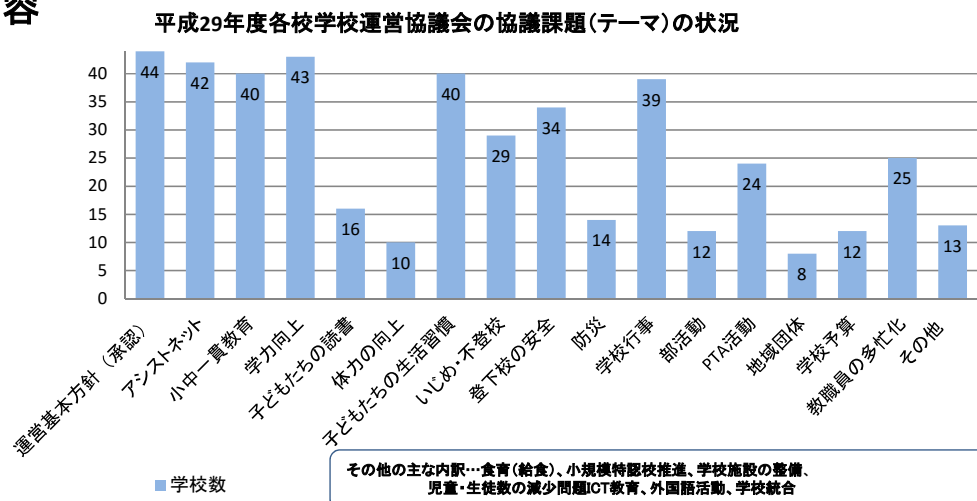
全体 351名（男性196名 女性155名） 1校平均:7.97人

校長:44名 地域コーディネーター:58名 地域住民:159名 保護者78名 その他12名

(2) 学校運営協議会の会議数〔H29年度 実績〕

平均3.59回（5回:5校）

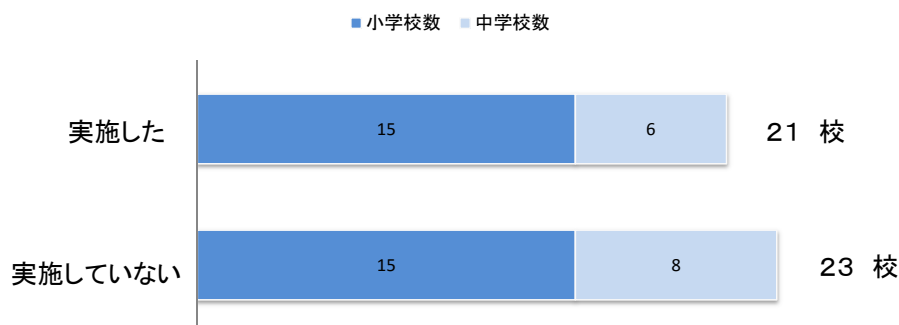
(3) 協議の内容



4. 栃木市コミュニティ・スクールの現況

(4) 立案からの実施状況

平成29年度各学校運営協議会の企画実施の状況



主な実施内容

- ・通学路の点検
- ・子どもたちの体験活動
- ・学校支援ボランティア募集
- ・PTA本部役員との懇談
- ・民生委員との懇談
- ・学校行事への参画
- ・地域行事への子どもたちの参加(参加)
- ・家庭教育学級への参画
- ・部活動の種目削減

4. 栃木市コミュニティ・スクールの現況

(5) 平成30年度栃木市コミュニティ・スクールの具体的推進

① コミュニティ・スクールについての関係者への理解及び保護者や地域住民への周知を進める



- 教育委員会担当者の会議等への派遣
- リーフレットの配布
- 学校だより、学校ホームページを活用しての情報公開・発信 等

② コミュニティ・スクールを核に、各学校・学区における「とちぎ未来アシストネット」の推進を図る。



- 学校支援ボランティア募集のための協議・実践
- 地域行事等への児童生徒参加(参画)のための協議・実践

③ 小中一貫教育や教職員の多忙化解消(先生の働き方改革)と繋げた‘学校・家庭・地域’の連携協働を進める。



- 学校運営協議会の協議テーマとしての設定

④ ‘立案から実施へ’コミュニティ・スクールの趣旨を踏まえた活用を図る。



- PDCAサイクルを意識した学校運営協議会の活用
- 委員と学校との関係づくり(互いに信頼しやすい関係)

5. ‘現場から見た’ 栃木市コミュニティ・スクール

(1) CS導入を巡る様々な立場の議論

◆校長(「市校長会 H28.9.2」での議論より)

- ・委員の人选がポイントとなる。
- ・公民館と地域の密着度の違いにより差が生じる。
- ・小中の合同会議を開催して小中一貫教育の中核にしたい。
- ・地域からの人选にはみえない順番・秩序がありやりづらい。
- ・実働的な人材となると元PTA会長がよい。
- ・保護者批判、昔語りの委員人选はNGにしたい。本市の1年交代制はよい。
- ・学校の課題をどう伝えていくかは、校長の姿勢にかかっている。



◆地域コーディネーター(「市地域CD研修会 H28.7.29」での議論より)

- ・コーディネーターの後継者育成とコーディネーター同士の交流が大切。
- ・家庭や地域の課題との向き合いには、公民館との連携が大切。
- ・コーディネーターからの提案をもっと積極的に行いたい。
- ・ボランティア活動後、先生方との振り返りの時間をもっと確保したい。

5. ‘現場から見た’ 栃木市コミュニティ・スクール

(1) CS導入を巡る様々な立場の議論

◆教職員(「市教育講演会 講師:貝ノ瀬先生」 H28.4.21)での感想より)

- ・子どもたちと地域の方の触れ合いが、地域の活性化につながる。
- ・保護者等が、今まで以上に様々なことを言うてくるか心配している。
- ・困難な課題を地域とともに解決に当たれることは心強い。
- ・教員は、地域の人とともに教育していくことが大切な使命であると感じた。
- ・子どもたちが地域のよさに気づき、地域の担い手としての意識を高めることが大切と感じた。機会を生かして地域に入っていきたい。

◆市民(「市民センター研修会 講師:佐藤晴雄先生 H28.7.29」での議論より)

- ・少子高齢化のコミュニティの今こそ、CSが必要だと感じた。
- ・栃木市はとちぎ未来アシストネットの推進でCSは十分可能であると感じた。
- ・地域から学校へのベクトルはあっても学校から地域へのベクトルが少ない。
- ・学力向上等の課題解決のためだけでなく、学校を拠点としたまちづくりを目指していることを学びました。
- ・とちぎ未来アシストネットもCSも校長先生の考え方や行動で、その成果も大きく変わると思います。

5. ‘現場から見た’ 栃木市コミュニティ・スクール

(2) CS導入を巡る様々な立場からの不安と課題

- ①委員の人選の問題
- ②学校運営協議会の議論の内容
- ③教育の公平性と校長のリーダーシップ
- ④教員の更なる負担増
- ⑤学校を核にしたまちづくりの展望



解決のための方策

1. 委員の様々な養成講座・学習機会を通して、学校理解と学校参画意識の変容を促す。
2. 校長の経営方針ビジョンを明確化し、学校・地域双方の課題解決を目指す。
3. 地域学校協働活動につながる公民館・図書館・社会教育施設・福祉施設・関係団体との協働による地域づくりの活動を促す。

5. 実践事例 ～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(1) 学校運営協議会設置までの経緯

◆大平南小の場合

学校教育への保護者・ボランティアの参画例

- ①サマーチャレンジ(ボランティア講師による夏休みクラブ活動)
- ②読み聞かせボランティア育成(ピッコロクラブ・家庭教育学級ママネットみなみ)
- ③多世代交流・保護者同士・親父の会等の交流の場の設定
- ④協働事業の提案(120周年記念事業・新校舎完成記念事業等)
- ⑤総合的な学習の時間を中心に教材研究(ふるさと学習:郷土の偉人「田村律之助」)



学校教育への参画意識を高め、
学校理解と地域人材の育成を図る



5. 実践事例 ～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(2) 学校運営協議会委員の構成

大平南小 8名+校長

- ①Aさん(40代男) 親父の会会長 【会長】
- ②Iさん(70代男) 元大平町教育長 【副会長】
- ③Tさん(50代女) 大平地域会議委員
- ④Mさん(50代女) NPO大平スポーツネット
- ⑤Iさん(50代男) PTA会長
- ⑥Kさん(60代女) 大平みなみ幼稚園長
- ⑦Mさん(70代男) 元自治会長
- ⑧Oさん(40代女) 地域コーディネーター

大平中央小 8名+校長

- ①Tさん(60代男) 元小中PTA会長 【会長】
- ②Tさん(40代男) PTA会長 【副会長】
- ③Uさん(30代女) PTA副会長
- ④Kさん(60代男) 自治会長
- ⑤Hさん(60代女) 書道塾経営 本校祖父母
- ⑥Kさん(60代男) 元日立理科クラブ
- ⑦Tさん(60代女) 地域コーディネーター
- ⑧Oさん(50代男) 人権福祉施設館長

人選のポイント

- ① 充職ではなく、協働プロジェクトの実行部隊・学校評議委員からの参画メンバーを選出
- ② PTA枠・地域枠・ボランティア枠・小中一貫枠のバランスが重要
- ③ コーディネート力を有する人材を選出することが最大のポイント

5. 実践事例

～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(3) 熟議の様子



①大平南小の学校運営協議会の議論

- ◆ 熊本地震の募金活動について
→ 委員が熊本市内の同業者とつながり、絵本を贈る
- ◆ 新校舎を生かした「ともに学び合う学校づくり」協働プロジェクト
- ◆ 学力向上について
→ 生涯にわたり学ぶ子の育成 学習ボランティアの更なる充実
- ◆ 外国人の児童の教育について
→ 地域に外国語を話せるボランティアが必要
- ◆ 地域での様子
→ 安心安全のために、学校にすぐ連絡できる体制をつくる
- ◆ 授業参観の感想
→ 新校舎のスペース活用が充実している

5. 実践事例

～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(3) 熟議の様子



②大平南小 協働プロジェクトの企画・提案

- ◆ ふるさと学習
→ 学習のまとめとして、交流活動の様子をHPで紹介したり、山本有三、田村律之助、関口春次郎等の郷土の偉人のまとめを小冊子にまとめる。
- ◆ サマーチャレンジ
→ 夏休みの2日間、地域の方との交流を図り、ともに作品作りを行う。
- ◆ 南小親父の会・読み聞かせピッコロクラブとの協働事業
→ 夏休みならではの親子体験活動 読書週間での図書館開放・読み聞かせ活動・バイオリンコンサートの開催
- ◆ 豊かな文化・芸術体験活動の開催
→ 地元出身の音楽家を招聘した鑑賞会 児童作品展
- ◆ 家庭教育学級ママネットみなみによるママCAFÉの開催
→ 新校舎での保護者同士のつながり

5. 実践事例

～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(3) 熟議の様子



①大平中央小の学校運営協議会の議論

- ◆ 学校経営計画について
 - 目指す学校像「人権・子どもの文化の創造」
「学校・地域・家庭を支えるボランティア協働楽校」
- ◆ 子ラボチャレンジの計画について
 - 子どもが学ぶだけでなく、地域に発信(貢献・ボランティア)する
- ◆ 自治会との情報交換
 - 地域イベント・行事と学校行事が重ならないように情報の共有を
- ◆ PTA活動について
 - 学校支援ボランティアとしての多様な係わりと学校理解の促進

5. 実践事例

～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(3) 熟議の様子



②大平中央小 協働プロジェクトの企画・提案

- ◆ とちぎ未来アシストネットの活用
 - 地域の方との交流 体験学習へのゲストティーチャー
- ◆ 中央小 子ラボチャレンジ
 - 夏休みの2日間、地域の方の指導による体験活動・交流活動・人権学習
- ◆ 小中一貫の試み
 - 親父の会・読み聞かせボランティア・まちづくり団体との協働事業
同一中学校区での読み聞かせボランティア交流会
- ◆ 児童会活動による地域との連携
 - ワールド集会・福祉施設訪問・感謝の会・校外児童集会 等
- ◆ 地域との双方向の情報受信
 - 育成会・自治会活動の情報をこまめに受発信し、参加する

5. 実践事例 ～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(4) 協働プロジェクトの実際

①新校舎完成 学校開放 『よろしく新校舎』 H28.2.13



①新校舎完成 学校開放『よろしく新校舎』



5. 実践事例

～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(4) 協働プロジェクトの実際

②子ラボチャレンジ ～社会福祉教育施設との連携～

◆大平隣保館との協働



②夏休み『子ラボチャレンジ』



5. 実践事例 ～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(4) 協働プロジェクトの実際

③学校開放～「親子わいわい塾」&野外映画会～



③学校開放『親子わいわい塾 &野外映画会』



5. 実践事例 ～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(4) 協働プロジェクトの実際

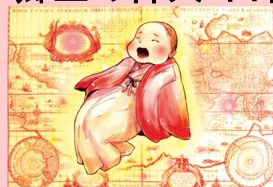
④親の学習機会の充実 ～家庭教育学級「ママネットみなみ」～ ◆校内読書週間「一日おはなしキャラバン」



5. 実践事例 ～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(4) 協働プロジェクトの実際

④親の学習機会の充実 ～家庭教育学級「ママネットみなみ」～ ◆郷土の偉人「田村律之助」の紙芝居完成 親父の会による上演



5. 実践事例 ～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(4) 協働プロジェクトの実際

④ 親の学習機会の充実 ～家庭教育学級「ママネットみなみ」～ ◆ 郷土の偉人「田村律之助」の紙芝居完成 親父の会による上演



5. 実践事例 ～大平南小学校・大平中央小学校を事例に～

(5) 児童・保護者・学校運営協議会の様子

① 児童の変容（学校評価における自己評価から）

- 学校への愛着が高い
- 友だちと一緒に取り組む活動に対する関心が高い
- 他者とのコミュニケーションも全般的に大変良好な状態である
- 昨年度と比較して「安全に過ごす」「進んで清掃・奉仕活動に参加する」の項目が5ポイント以上あがった。

② 保護者・ボランティアの変容（アンケートの回答から）

- 「自分の子ども以外にもよそクラスや他学年の子どもたちにも関心をもてた」 58.8%
- 「学校が身近に感じられた」 63.6%
- 「学校任せにしないで、家庭の役割を果たそうと思うようになった」 60.0%
- 「学校支援ボランティアとして機会があれば活動したい」 24.2%（少し 63.3%）

③ 学校運営協議会の変容

- 挨拶運動・学力向上・虐待・DV問題・被災地支援等切実な課題を熟議した。
- 学校経営に対する当事者意識が評議委員時とは異なり、議論の時間と質が変化した。
- 地域住民の目線で学校の課題、家庭の課題、地域の課題を共有できた。

学校評価 (2017. 保護者アンケートから)

設問1 学校の教育目標や方針や情報がわかりやすく知らされている。(P総会・学校だより・学年だより・保健だより・メール等)

設問2 学校は、保護者の願いや期待に応える努力をしている。(家庭訪問・個人面談・学級懇談・スクールカウンセラー等)

設問3 学校は、保護者や地域の方と協力し、子どもたちの安全確保に努めている。(P防犯パトロール・見守隊・下校指導等)

設問4 学校は、保護者や地域と協力して特色ある教育活動を行っている。

(サマーチャレンジ・ふるさと学習等)

設問5 先生方や学校は、わかりやすい授業や教材の工夫に努めている。

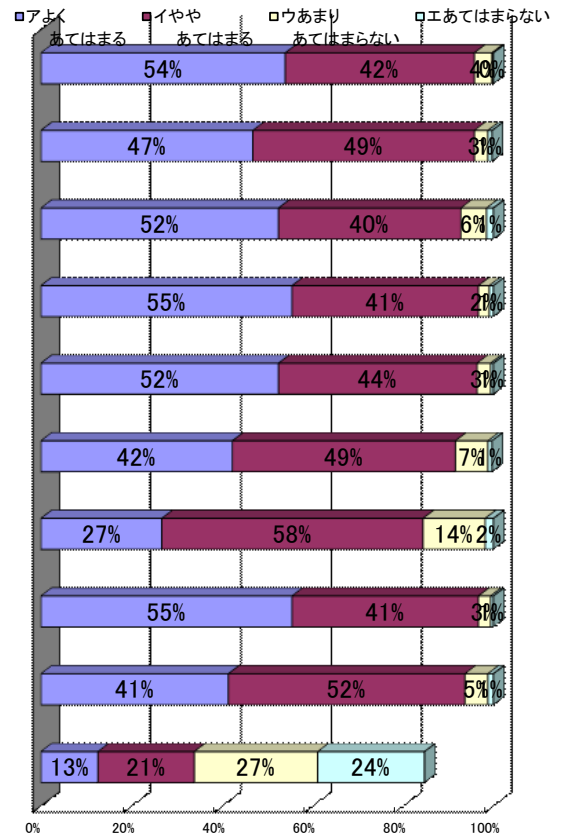
設問6 学校は、何事にも根気強く取り組もうとする気持ちを子どもたちに育てようとしている。

設問7 お子さんは、家庭や地域であいさつをよくしている。

設問8 ご家庭ではあいさつをすることを心掛けてお子さんに声かけをしている。

設問9 学校は家庭と連携して、学習(宿題・読書・自主学習等)の習慣を身に付けさせる工夫を行っていますか。

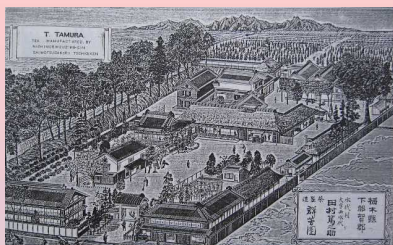
設問10 今後、学校支援ボランティアとして活動してもよい。



地域学校協働活動に向けて ◎田村律之助顕彰会の設立

- ・ 栃木市の小中学校で進める「ふるさと学習」を大平地区の読み聞かせの会と大平南小学校のPTA・教員のメンバーを核に関係団体や行政と協働しながら、律之助生誕150年を記念しその業績を顕彰し、郷土の偉人や地域の歴史や文化・自然等の地域資源の教材化を進め、郷土の偉人を広く市内外に発信することを目的に同団体を設立した。





学校・博物館・子ども・
地域をつなぐ
協働のまちづくり



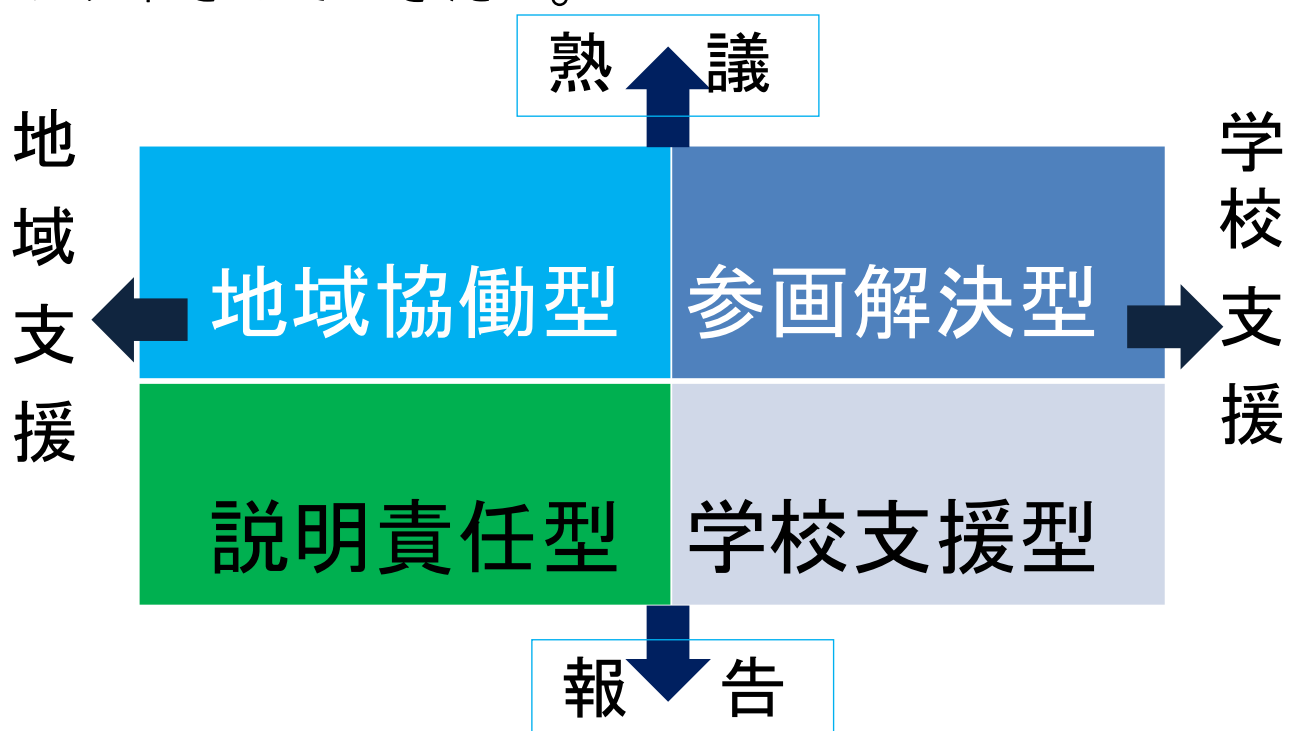
律之助顕彰会と大平ブロックとの協働 「協働プロジェクト2018」



ビール麦栽培日本一の栃木市を 全国に発信する



6. まとめ～栃木市コミュニティスクールを通して～
 (1) 学校支援型から参画協働型・地域協働型に
 シフトさせていきたい。



6. まとめ～栃木市コミュニティスクールを通して～

(2)地域学校協働活動に向けて

◎学校運営協議会委員の持つコーディネート力が新たなまちづくり・地域課題の解決のツールになっている

- ①まちづくりのイベントへの保護者・児童・生徒参画
- ②公民館・児童館等での他団体の協働
- ③「DV解決へのサポート」「子ども食堂」の開設に向けて
- ④まちづくり地域会議での予算提案
- ⑤地域主体の学校開放講座
- ⑥「田村律之助顕彰会」発足



◎学校の持つ教育機能の地域への還元・発信

- ①教員・・・教員の地域社会参加・指導者・公民館講座・生涯学習の機会
- ②児童・生徒・・・地域行事への参加・ボランティア・観光ガイド役に
- ③施設・校舎の開放・・・社会教育・文化施設の機能として共有
- ④社会に開かれた学び(カリキュラム)・・・町探検・合同学習会
地域教材の開発
- ⑤関係性・・・親父の会が児童館のイベントに出店
まちづくり実行委員で活躍



ご清聴ありがとうございました…

